



米国発シックスシグマの活動と我々のものづくり活動との比較

1968年卒 加藤健治

いきさつ

一昨年(2014年)の京機短信で、中国で多くの会社の品質管理の指導をされている岩名さんの投稿文(236号~242号)を拝読しました。その中で中国の会社で"米国発のシックスシグマの活動"が行われていることを知りました。岩名さんより、シックスシグマに関する資料を送って頂き、図書館より、シックスシグマに関する図書を借り、我々の品質の、(もの)造りこみ活動と比較しました。

シックスシグマは1987年米国モトローラ社から紹介され、IBMなど米国の多くの会社に展開され、その中で米国GE社で行われたシックスシグマの活動は有名で、経営的観点から取り組まれたものであり、会社全体で精度をシックスシグマにまで高めようとするトップダウンの活動で、各種精度だけでなく、全部門の業務、行動のバラつきまで対象とした全社活動とされています。また、その後"リーンプロダクション"によるスムーズな物の流れづくり(平均値を良くする。)と合わさった活動として展開されております。

シックスシグマ活動と、トヨタグループのもの造りの活動との比較

1. シグマを劇的に減らす(6 σ)目標値設定について

"バラつきを減らすことを全社で取り組む、という発想"から、思い出しました。私が以前、工場で、ラインの生産性向上のための改善に、取り組もうとした時上司から、"こんなよく止まるラインで、まず、頻りに止まることをなくし、バラつきを減らすことが急務だろうと、効果が分からないぞ。"と頻りに発せられた対策に早く取り組まないことを叱られたこと、思い出しました。

GE社はシックスシグマの活動後、リーンプロダクション(無駄のない、スムーズな流れによる生産)という平均値を向上する活動につなげていることは、筋の通った進め方をされていると考えます。得てして、早く効果を上げたいので平均値を良くすることを取り組もうとしがちですが、シグマを全社目標にされた取組はよく検討された結果と考えます。

シックスシグマの活動後（シグマが小さくなった後）、リーンプロダクションという生産性を上げる（平均値を向上）活動に連携されていかれたとのことですので、筋の通った活動と考えます。

2. スタッフ部門の業務を含め全社活動にされたこと

ものづくりのラインでは、作業を標準化し、スムーズな流れで良品を造ることを考えるのですが、スタッフの仕事にも、はやく適用されて、全社全部門の活動にされたこと、すばらしいと考えます。我々も実施してきました。

もの、でなくても、"仕事の流れ"と見て適用されていること、すばらしいと考えます。

3. トップダウンのプロジェクト活動と自立した現場が主役の活動：

シックスシグマでは、専門能力の高いリーダーをもとにプロジェクトチームがつくられ、社長直轄で、推進されています。以前、京機短信 186 号で住友電気工業の西田先輩が「日本のモノづくりに思う」と題して「現場主義」「完璧主義」「集団主義」が日本独特の考え方として論じられておられました。

現場主義は事実重視主義、完璧主義は不良ゼロ活動、集団主義は一体感、と集約されています。その通り、と実感しております。私は、その考えをもとにして、現場が自立し（上流工程の指示を丸飲みにして動くのではなく、）活動ができる、すること（職人氣質）が、日本のモノづくりのベースにある、と考えます。（現場の責任で問題解決、未然防止活動を行えるよう、工場によっては、技術員室という組織かスタッフがいます。現場の問題は現場主体で解決する、できるのです。）トップダウンで指示されたことのみ実施するだけでなく、現場自身が主体で考えた活動を、自立して、できる、します。それを、会社トップが現場で確認し、示唆を与えるのです。山田さんがのべられていた現場主義と良く似ていると思うのですが、現場も、（全社プロジェクトでなく）、社内関係部署（製品設計、計測、工程設計など専門家）を巻き込んで実施できる、人、組織がモノづくりにには大切と考えます。全員、全工程自身が、"悪いものは造らない、誤った仕事はしない"ということで、自工程完結ができます。

トップダウンのシックスシグマプロジェクトはプロジェクトリーダーをブラックベルト、グリーンベルト、イエローベルトと育成し、最終的には全社展開することを目標にされていますが、現場が自立していることから始まる我々のモノづくりの進め方と順序が逆になっています。工場では最初から技術員室という技術スタッフ組織を持っており、継続的に自立した現場を維持できることがプロジェ

クトを組まなくてもできる大きな要因と考えます。

4. 未然防止活動によるロスコストゼロでの立ち上がり

シックスシグマの活動では、取り上げるテーマの効果をコストに換算し、コスト効果が大きい順に取り上げるテーマを決めております。安全、品質の問題は発生するとロスになります。発生した不良品の数を減らす後処理の仕事ではなく、また、検査で防ぐのではなく、発生させないことが、本来の活動です。そのためには立ち上がる前に未然防止活動を実施せねばなりません。

未然防止活動は自立した現場自身が主体で実施しますが、コスト評価困難です。悪いものは造らないことで立ち上がることがモノづくりの役割と考えますが、ロスゼロはコストの面でも効果大です。

未然防止活動は次のような活動です。

(1) QA ネットワーク活動

各工程で発生しうる不具合をすべてあげて、発生防止と流出防止の縦系横系（縦、横のネット）のネットを張り、発生防止確率を100%にする（自工程完結）工程を目指す。万が一故障が発生した場合、どの工程で止まるかどうか必ず確認しておきます。

① " 組み付け工程 " の人は必ずミスをするを前提としたQA ネットワーク活動

② 加工から材料までの設備工程の本質品質保証工程づくり、自工程完結工程造り、そのための精度向上活動

(2) 立ち上がり前の人の教育とライントライ（少量トライ、多量トライに）による問題天の摘出と対策)

(3) 立ち上がった後の変動前での未然防止、: 人、製品、設備の条件変化の前に対策しておく変化点管理

悪い物は造ってはならないので、起きる前に対策せねばならない。この活動は、被害は発生していないのでシックスシグマの活動には入らないが、必須の未然防止活動です。モノづくりをしているかぎり。

5. プロジェクトチームによる推進か、自立した現場が取り組む組織による推進か

シックスシグマでは能力の高いリーダーのもとでのプロジェクトチームにより解決をはかっております。人材育成はブラックベルト、グリーンベルト、イエローベルトとリーダーを養成し全社に展開されている。シックスシグマ活動の統計解析、精密測定に対して高い専門能力が必要なためかと思えます。我々の、現場が自立した組織では、①現地現物、②なぜ5回の問題解決手法が主体で解析能

力がおよばないとき技術員室という技術スタッフ組織が外部専門技術陣（計測技術、設備技術、製品設計部門）をまき込み解決する体制です。

問題解決手法は、現地現物と、5W主体がスタートです。

工場に技術員室という技術スタッフ組織があることが、自分達が主役で問題解決できる組織です。全員1件/月提案目標となっている創意工夫提案活動とQCサークル活動が、全員自立して考えられる人材育成につながっていると思います。

余談ですが、他社から工場見学に来られた方への現場説明を工場で行っていた時、現場で、工程の考え方で見学者と、めずらしく議論になったことがありました。お互いに自分達の考え方を主張し、引かなかったのが強く覚えています。ドイツのメーカーの工場技術者でした。日本の職人魂に対しマイスター魂かなと、思い、当時、何か共感を感じました。

(おわり)

—— 京機短信への寄稿、宜しくお願い申し上げます ——

また、原稿が切れてきました。京機短信存続が問題になるレベルです。

是非とも投稿、お願い致します。 気楽に !!

但し、原稿のタイトルの次に、**著者名と卒業年次を必ず記入**してください。その記入のない投稿がかなりあり、編集者の仕事を増やしていますので、何とぞご配慮の程、お願い申し上げます。

【要領】

宛先は京機会の e-mail : jimukyoku@keikikai.jp です。

原稿は、割付を考慮することなく、適当に書いてください。割付等、掲載用の後処理は編集者が勝手に行います。 宜しくお願い致します。

朝永正三先生にとっての工部大学校と東京大学の合併と、その後

(その4)

藤尾博重 (精密工学教室元教官)

(3-2-3) 東京大学・工部大学校における授業

(3-2-3-1) 授業時間数

工部大学校が東京大学との合併に際して、当時の授業はどのようなものであったかを見よう。そのために、東京大学における授業科目の週時間数・年間を通じての総時間数を、工部大学校での受講科目および週・年間総時間数を対比させて検討することにする。

表7はその結果をまとめたものである。この表7での左半分は、東京大学の講義科目に対する各期の時間数、および、年間を通じての総時間数を示した。これらの授業科目・週時間数について、東京大学五十年史では、文章の形で羅列状に記載されており、ここではまとめて表の形で提示した。

この表の右半分には、工部大学校で実施された授業科目を学年ごとに、また、各学期（東京大学は3学期制、工部大学校は2学期制）ごとに、東京大学での授業科目とほぼ対応する形で示した。

以下では、筆者が問題にしているのは、朝永先生が帝大に在籍した第1学年時において、帝国大学発足時の授業を履修したのかを筆者が疑問を呈しているので、東京大学における授業について検討する。

この検討に際して、当時の学期について触れておかなばならない。東京大学は、3学期制であり、学年は9月11日に始まり、学年末は7月10日。学期は3学期制を敷いており、第1学期は9月11日から14週。それ以降の各学期は11週、13週となっている。これに対して、工部大学校では、学年は4月に始まり、学年末は翌年3月。夏学期は4月～7月、冬学期は10月～翌年3月までの2学期制であり、その期間は13週、25週であった。工部大学校の第1学年については、入学時期がほぼ月半ば以降であることから、夏学期は11週として計算した。なお、前述の週数は概数であることを前もって断っておく。

このことを念頭に、年間総時間数を検討する。表7において、各学年の年間総授業時間を学年ごとの最下段に赤色の文字で示した。この結果を比較すると、第1学年から第3学年に至る迄、各学年とも工部大学校の方が時間数は相当多い。

東京大学第1学年における年間を通じての授業・実験総時間数は766時間、つまり、概数として770時間と見なして差支えない。これに対して工部大学校第1

表7 明治15年当時における工部大学校・東京大学の授業科目・授業時間数

学年	東京大学			工部大学校		
	科目	各期週授業時間	年間授業時間	科目	各期週授業時間	年間授業時間
第一学年	数学（代数幾何）	4 4 4	152	数 学	7.5 7.5	285
	物理学（半年間週2時）	2 1	34	理 学	3 2	72
	重学大意	2	22			
	星学大意	2 1	34			
	化学（無機 実験）	4 4 4	152			
	金石学大意	2 1	34			
	地質学大意	2 1	34	理学試験場	6	150
	晝学	2 2 2	76	図学	4.5	113
	論理学	2 2 2	76	本朝学	5	55
	英吉利語	4 4 4	152	英 学	7.5 7.5	285
				書 房	4.5	50
		年間総授業時間 766			年間総授業時間 1,010	
第二学年	数学	4 4 4	152	数 学	7.5 3	173
	重学	4 4 4	152			
	物質強弱論	2 2 2	76			
	陸地測量	4 4 4	152			
	物理学	4 4 4	152	理 学	7.5 4.5	255
	冶金学	1 1 1	38	化 学	4.5 7.5	434
	機械図	4 4 4	152	図 学	4.5 4.5	171
	英吉利語	2 2 2	76	英 学	6 6	228
	独逸語	2 2 2	76	書 房	1.5 1.5	57
		年間総授業時間 1,026			年間総授業時間 1,318	
第三学年	熱動学及蒸気機関学	2 2 2	76	蒸気機関機械学	3 3	114
	結構強弱論	2 2 2	76			
	機械学	2 2 2	76	数学	3	75
	道路及鉄道測量及構造	6 6 6	228			
	物理学	3 3 3	114	理学	2	50
				理学試験場	6	78
	機械図	4 4 4	152	機械図學	17 17	646
	独逸語	2 2 2	76	応用重学	3 3	114
				工場試験場	6	150
				実地事業	9	117
	年間総授業時間 798			年間総授業時間 1,344		
第四学年	機械計画製図実験			機械工学	3 6.5	202
	材料試験			図学教場	14.5 14.5	551
	機械所実験			工場試験場	14 14	532
	卒業論文（邦文漢文若英文）				年間総授業時間 1,285	

学年における授業総時間数は1,010時間となって、工部大学校の方が授業時間は相当長い。第2学年、第3学年の年間総授業時間数についても、その傾向は変わらず工部大学校側の授業密度が非常に高かったことが分かる。

この結果からも分かるように、授業時間数を一つの指標としても、工部大学校の学生が密な学業生活をおくってきたことも、合併反対を唱える一つの根拠としていたといえよう。

表8 主要科目の授業時間数

東京大学				工部大学校			
科目	学年	週 時間数	年 時間数	科目	学年	週 時間数	年 時間数
数学	第一学年	4 4 4	152	数 学	第一学年	7.5 7.5	285
	第二学年	4 4 4	152 304		第二学年	7.5 3	173
					第三学年	3	75 533
物理学	第一学年	2 1	34	理 学	第一学年	3 2	72
	第二学年	4 4 4	152		第二学年	7.5 4.5	255
	第三学年	3 3 3	114 300		第三学年	2	50 377
				理学試験場	第一学年	6	150
				第三学年	6	78 228	
晝学	第一学年	2 2 2	76	図 学	第一学年	4.5	113
機械図	第二学年	4 4 4	152	図 学	第二学年	4.5 4.5	171
	第三学年	4 4 4	152 380	機械図学	第三学年	17 17	646 929
重学大意	第一学年	2	22	応用重学	第三学年	3 3	114 114
重学	第二学年	4 4 4	152 174				
英吉利語	第一学年	4 4 4	152	英 学	第一学年	7.5 7.5	285
英吉利語	第二学年	2 2 2	76 228	英 学	第二学年	6 6	228 513

つぎに、表7より、第1学年～第3学年までの各科目の総時間数をまとめて表8に示した。各科目に於いて難易度は明確でないために、時間数のみで比較検討する。ここでは、第1学年～第3学年における科目ごとの時間数のみを対比して示した。1～3学年分のみを比較した理由は、東京大学第4学年の授業週時間数が示されていないことによる。

数学・物理・物理実験・英語・製図 については工部大学校側の授業時間は東京大学に比して多い。とりわけ、製図については、東京大学に比して2倍以上の時間数となっている。しかし、力学については東京大学側が多く、工部大学校に於いては、東京大学にて必修であったドイツ語はまったく課せられていなかった。この理由は、日本がいつれの国の法制度によるのかまだ決めかねている状況があったために東京大学では、英語、ドイツ語を必修科目として課していたので

あろう。また、専門科目に近い数学・物理・物理実験・製図については、工部大学校は工学技術者の育成が発足当時よりの目的であるのに対して、東京大学に於いては、表7の第1学年分の授業は、理学部・文学部・法学部に属するすべての学生（医学部学生の科目配当は全く別物）を対象にしたためである。また、東京大学第2学年、第3学年の理学部・文学部・法学部学生の科目は表7の第2学年・第3学年分とは各学部により若干の違いがあることを断っておく。東京大学に於いては、第4学年のみが専門授業科目となっており、当然 学部ごとに違ってくる。したがって、東京大学では、工部大学校に於けるように専門科目の配分がすくなかった事情があったことを念頭に入れておく必要がある。

さて、当時の学生は、工部大学校、あるいは、東京大学への入学前はどのような教育を受けていたのだろうか。工部大学校の入学条件としては年齢のみが定められており、「十五歳ヨリ二十歳ニ至るまで体質健康ニシテ行状端整ナルモノヲ試験シ及第スル者ヲ以テ入校ヲ免許スヘシ」（工部大学校學課並諸規則明治十年十月三日改正届出）となっている。

これに対して東京大学への入学条件（医学部を除く）は、まず第一に、「本部第一年級ニ入ルヘキ者ハ其齡十六年已上トシ第二年級ニ入ル者ハ十七已上トス其他之ニ準ス」とあり、さらに、「本部第一年級ニ入ルヲ許スヘキ者ハ予備門卒業ノ者若クハ然ラサルモ該門ニ於テ試業ヲ施シ之ニ等シキ学力アリト認ムル者ニ限ルヘシ」（東京大学百年史 資料一、東京大学法理文学部規則改定M12-11/18）とあって、基本的に東京大学予備門を卒業することが求められた。明治5年の学制にもとづく地方の中学校が未だ整備されていない当時の状況では、予備門がほとんど唯一の大学（この時点では東京大学のみ）予備教育機関とならざるを得ない事情があったために、予備門を卒業することが東京大学への入学条件になっていたのであろう。ここで、「本部」とは、東京大学法学部理学部文学部のことであろう。また、「已上」は以上の意である。

(3-2-3-2) 予備門での授業時間との関係

東京大学への入学するには、予備門での課程を経ることを前提としていたために、東京大学での授業編成も予備門における授業を考慮したものであり、予備門の入学年齢、授業科目について検討しよう。

第一高等学校六十年史（発行：昭和14年7月31日）によれば、予備門における入学条件は、発足時には年齢が「第一年級（最下級）ニ入ルヘキ者ハ十三年已上トシ」（明治12年 東京大學豫備門諸規則）とあり、13歳以上が入学条件。しかし、明治17年2月発行の「東京大學豫備門一覽：本覺 自明治十六年至明治十七年」では、「第十条 第一年級（最下級）ニ入ルヘキ者ハ其齡十四上

トシ・・・」(P.32)とあって、資料によって入学年齢に違いがある。なぜこのような差があるのか不明であるが、年齢を「数え年」、「満年齢」によるものであろうと推測して、議論を進めることにする。ここでは、第一高等学校六十年史に記載の入学年齢(13歳)にもとづけば、その年齢は今の中学2年生の年齢に相当する。

予備門において明治16～17の時期における講義科目のうちで、東京大学理工学部における授業の前提となる理工学系科目(数学・物理・製図)を表9に示した。

表9 予備門における明治16～17年頃の理工学系科目

学年	予備門(14,11,13週)			
	第1年	第2学	第3学	年間延時間
数学	4 4 4	6 6 6	6 3 3	536
物理			3 3 3	114
製図	2 2 2	2 2 2	2 2 2	228

予備門数学 : $152+228+156=536$ 時間

東大 数学 : 304 物理 : 300 製図 : 380 時間

表9において、例えば、第1学年の数学欄には3つの数字4 4 4が示されており、これらは学期ごとの週当たりの授業時間数が4時間であったことを示している。予備門における各学期の開始・終了日は東京大学のそれに準じており、それを考慮に入れて、年間時間数を第5欄に示した。

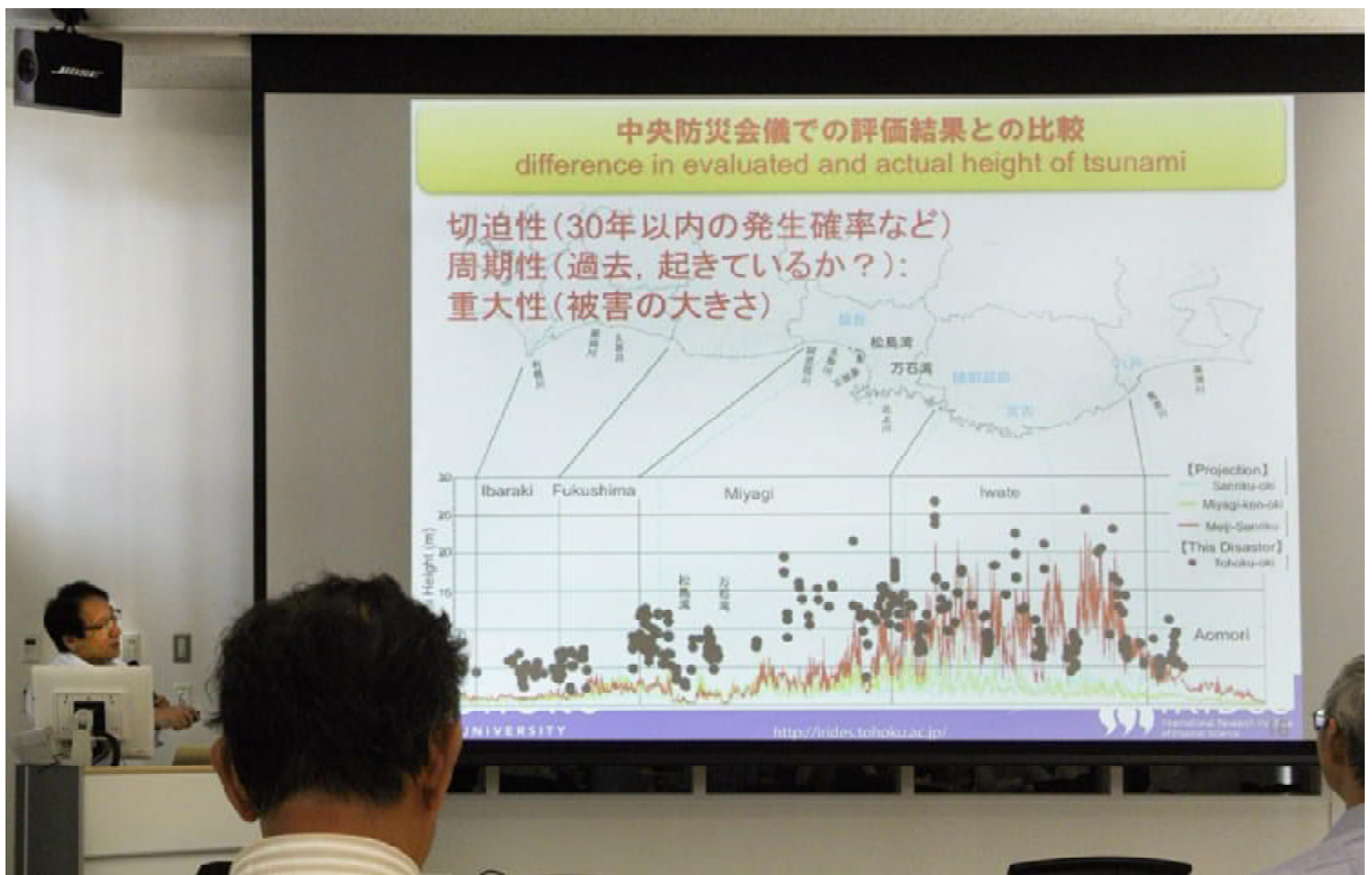
この第5欄の数字に、東京大学の数学・物理・製図の在学中の時間数304, 300, 380を加えると、840, 414, 608時間となる。これに対して工部大学校のそれらの各科目の述べ時間数は533, 605, 929となっており、数学については東京大学学生の方が授業時間数は多く、物理・製図については工部大学校学生の方が長時間受講したことになる。なお、工部大学校での物理の授業時間については、理学試験場における時間228(表8 理学欄の破線以下分)を加算して考察している。

そこで、予備門における数学の授業内容はいかなるものか、もう少し吟味することにしよう。そのことについて、「東京大学豫備門一覧 本覺 自明治16年至明治17年」(編纂 東京大学豫備門 明治17年2月出版)より引用して、表形式に改めて表10に示した。

なお、表10について検討する前に、上記の「本覺」について記しておこう。第一高等学校六十年史(同書 P.10)によれば、明治10年「東京開成学校と東

京医學校とを併せて東京大學と為すに及び、東京英語學校は文部省直轄を解かれて東京大學に附属せしめられ、東京豫備門と改稱することとなり、その學科課程の改正を見、・・・茲に大學豫科の形貌をなすに至れり。尤も當初は単に法理文三學部のみの豫科たりしに過ぎざりしが、十五年六月東京大學醫學部豫科を廃してこれを豫備門に編入せられ、これも一時は分覺と稱して従來の本覺に対立し、・・・十七年七月本覺分覺の別を廃し、・・・その統合を完成するに至り、更に十九年四月には工科大學予科を編入して、漸次完全なる大學豫科の姿を形造る至りしものなり」と。つまり、「本覺」とは、予備門における法理文學部を意味していた。

(つづく)



P. 12 今村先生のお話し

平成28年10月15日（土）に標記の会を開催した。東北の会にとっては、本格的な活動の最初の企画であった。平成26年3月に清野慧氏（昭和42年卒）を会長として本会を設立し、毎年3月に総会、例会を開催してきた。しかしながら、特別な行事を設定するに至らず、今日に至っていた。この度、平成23年3月11日の東日本大震災を経験した東北の会会員の立場ならではの地域性を考慮してこの企画を発案した。

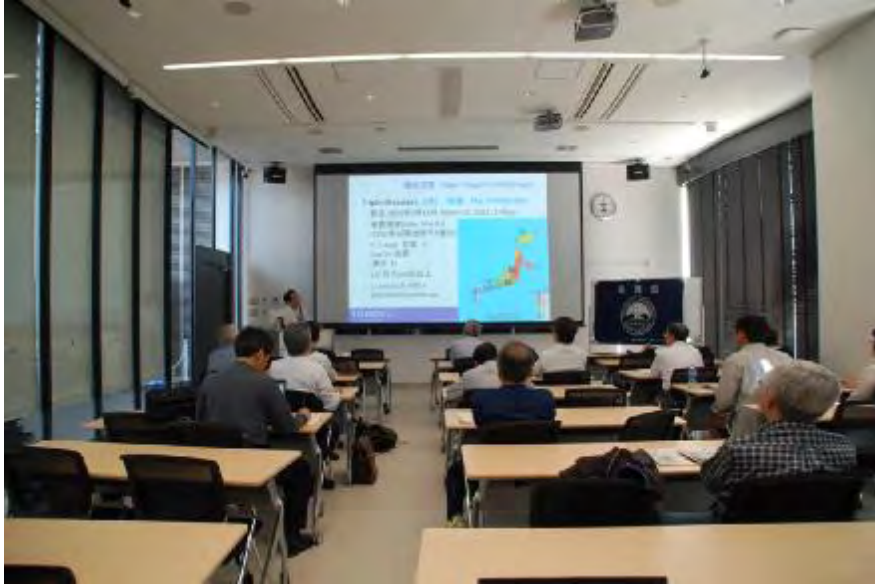
大震災前は、個人的事項になるが私の趣味から石巻、奥松島方面にはよく魚釣りに出かけたものであるが、大災害発生後、石巻を含め災害のあった太平洋岸には近づく気持ちにならず過ごしてきた。しかしながら、各種報道で被災地の復旧、復興の話を耳にすると、いずれは足を向けてその様子をこの目で見たいという気持ちは芽生えてきていた。京機会の行事を考えると、大災害から5年半を経過し、被災地を訪れてみたいという気持ちに変わってきた。このような内容に付き、清野会長と相談したところ、賛同を頂いた。そこで、この機会を捉えて、津波研究では第一人者である東北大学災害科学国際研究所（以下、研究所）所長の今村文彦教授に講演を依頼したところ快諾頂き、併せて新しく平成24年に発足した研究所の見学の提案ならびに石巻の復興に携わる組織についても紹介頂いた。

以上が、今回の会を開催するに至った概略の経緯であり、京機会事務局を通して全国会員に周知された。残念ながら、東北の会の会員は数が少なく、これまでも京都大学工学系同窓会会員で仙台在住の方と連携しながら活動してきている経緯があり、今回の企画についても案内をさせて頂いた。

1. 津波講演会と研究所見学

午前10時から研究所内において今村教授から「大災害を繰り返さないための実践的研究の最先端」と題して約60分の講演を頂いた。参加者は、16名であった。会員では、東北の会を始め、関東支部、中部地区、関西支部などから遠路仙台までお出で頂いた。今村教授からは、大震災の実態、その災害から得られた教訓、これを今後の防災・減災に生かす工夫や実践などが紹介された。東日本大震災の後、本年4月14日には熊本地震が起こった。被害状況を見ると東日本大震災の教訓が生かされていないことをつくづくと感じた。また、最近では10月21日に鳥取県中部地震があり、活断層の無い箇所でも地震が発生することが分かった。日本は絶えず台風や地震などの自然災害に直面していることを実感として感じる事が最近多くなってきている。そのためにも、災害の教訓から得られる防

災・減災の取組が重要となってきたと言える。講演の様子を以下の写真に示す。



講演終了後質疑応答も活発に行われたが、時間が足らず研究所案内の際にも多くの質問が出ていた。研究所見学の様子を以下に写真に示す。



2. 石巻を歩いて見る会

講演会に参加した全員が石巻に移動し、午後2時から歩き始めた。石巻では公益社団法人未来サポート石巻 (<http://ishinomaki-support.com/aboutus/>) の中川政治氏が案内に当たってくれた。中川氏は京都大学総合人間学部の卒業生で、当初今回案内を依頼したグループが京都大学工学部機械系の同窓会組織であることを伝えていたので、先方で配慮してくれたのだと思うが、私どもにとっては小さな驚きであった。彼は、震災後ボランティアとして石巻に入り、その後現在の組織で活動している由である。

今回の石巻のまち歩きでは、iPadのようなタブレット端末を持ち歩きながら市内を巡り、特定の場所で震災前後の様子が見える写真や映像を見ることができ、またその場所で津波の大きさなどが実感できるように工夫されている。そのようなアプリは中川氏が開発したとのことである。まち歩きの様子を以下の写真に示す。



石巻駅からの平坦な道を歩いてきた後、南に位置する日和山公園に向かった。標高約60mの高台にある日和山公園から津波の被害地を遠望し、麓に歩いて最後の目的地である門脇小学校跡に到着したときは、予定の時間ぎりぎりであった。門脇小学校は高さ6m超の津波に襲われ、かつ校庭に避難していた車から漏れ出たガソリンに引火して校舎は炎に包まれるという大きな被害にあった。しかしながら、日頃の訓練のお陰で、在校していた生徒は全員無事であったということを知り、私どもの気持ちは大いに和んだ。同小学校は閉校が決まっており、校舎に近づくことは危険であるため現在はフェンスで囲まれている。その前で参加者全員で撮った集合写真を以下に示す。



石巻駅から約2.5kmを約2.5時間かけてゆっくりと歩きながら、話を聞くことができた。最後に中川氏が、こんなにあくさんの質問がでたグループはありませんと、おっしゃっていたのが印象的であった。石巻を訪れる人は、バスや自家用車で要所要所を短時間で巡る場合が多いようで、今回のような企画はやはり現場をゆっくりと歩いて見る必要があることを実感した。

3. 懇親会

石巻から仙台に帰り、午後7時から参加者の懇親会を開始した。講演会と石巻を歩いて見る会の参加者の一部の方は都合がつかず、懇親会のみ参加者を合わせて11名の会であった。朝10時からの参加者の皆さんはかなり疲れると思い、仙台駅構内を会場に選んだ。疲れも吹っ飛ばすような和気あいあいとした雰囲気、今回の講演会や石巻での印象などを語り合いながら、京都大学時代の話などで大いに盛り上がった。その様子を以下の写真に示す。



(おわり)

ミロス島 (Milos)

檜原 勇多賀 (S37卒)

ギリシャ電力庁に納入された21,000キロワットの地熱発電プラントを見るため、ミロス島に行くことにした。案内役は商社の現地社員のエロイ氏である。アテネからミロス島までは空路もあるが、丁度観光シーズンで空席が無く、やむなくフェリーで渡ることになった。フェリーといっても1万トン級の大型フェリーで、途中5つの島に寄っていくため、ミロス島まで8時間もかかる。

フェリーの発着場であるピレウス港に着くと、大型フェリーが幾隻も係留され、乗客の積み降ろしに慌ただしい。ピレウス港に着いたのが午後4時半。出航は午後6時である。我々の乗るフェリー・キモロス号は、港の一番突端に係留されていた。長いタラップを渡って、船尾に大きく開いた口から船内に入る。客室は3階建てになっていて、一番上が一等個室、その下が一等客室、一番下が二等客室となっている。我々は、一番上の一等個室を予約していた。

まだ陽が落ちていないので、船首のデッキに出てビールを飲みながら辺りの景色を眺める。風が肌に心地よい。ギリシャ本土が次第に遠ざかり霞んできた頃、辺りは急に暗くなったので部屋に戻った。部屋には、いつの間にか半ズボンに着替えたエロイ氏がベッドの上に横になって本を読んでいた。



「早く行かないと無くなってしまう」

と言う彼の忠告に従って、早速食堂に急いだ。彼の言うとおりに、食堂は既に客で満ちていた。やっと空きテーブルを見つけ、食事にありつけた。スパゲッティとサラダだけの簡単な食事だが、ビールがあるので、もう、文句なしであった。再び部屋に戻り、エロイ氏から「グッド アイデア」と何度も感謝されたカナディアン・クラブ（ウイスキー）のボトルとさきいかにピーナッツのつまみを取り出し、酒盛りが始まった。読みは正しかった。8時間の船旅の無寥を慰めてくれるのに大いに役立ったのが、このボトルであった。

ギリシャ人は良くしゃべる。エロイ氏も例外ではない。顔中髭だらけで、アリストテレスやプラトンを彷彿させる容貌だけではなく、本当に議論好きである。

ギリシャでは、いまでも小学生の頃から紅白に分けて、論争の実技をやるそうだ。まず紅組は、白組の欠点を並べ立て、白組は指摘された点を弁護する。そして次は赤白交替して、攻撃と弁護を繰り返す。ギリシャ人は、いまでも皆哲学者ばかりである。だが、哲学者ばかりでは国は栄えない。

話が弾み、ボトルがそろそろ空になるころ、船は最後の寄港地の港に静かに入っていった。時計を見ると、もう午前0時を廻っていた。部屋を出て、船尾のデッキに行ってみる。ここで下船する客が数人いたが、乗ってくる客はいない。辺りはひっそりと静まり返って、港の灯りだけが付近を煌々と照らしている。ミロス島に着いたのは、午前2時近くであった。人の群に混じって下船し、海岸づたいに5分も歩くと、我々の宿舎であるホテル・メルテミに着いた。ホテルに着くと、老夫婦が起きて我々を待っていた。部屋数が10くらいの小さなホテルで、2階の角の部屋に案内された。

翌朝7時ころ目が覚め、フロント兼ロビー兼食堂になっている1階に降りて行くと、同行のI君が先に起きてきて食事をしていた。食事が終わるころエロイ氏も起きてきて、工事業者のビオカットの車で地熱発電所に向かう。



ミロス島は、1820年に発掘されルーブル美術館に展示されているビーナスの像で有名になった島である。島は長さ22キロメートル、幅13キロメートルの馬蹄形をしている火山島で、人口は約5千人。北岸は出入りが多く、ここに島の首都ミロスがある。この島はかつて黒曜石、硫黄、石膏、含銀重晶石の独占的産地として有名であったが、現在は小麦、綿花、オリーブ油、果物を産する。地熱発電

所は、空港から東に3キロメートルほど入ったところにある。発電所の直ぐそばにオリーブ畑があり、発電所から出る硫化水素ガスのためこのオリーブが枯れて、持ち主から損害賠償を請求されたと聞いた。島の北側の高台にあるプラカはミロス島の典型的な村で、白壁のキクラデス調の家が



密集している。紺碧の空に真っ白い家の壁のコントラストがたまらなく美しい。

昼食は、ホテル・メルテミの近くのレストランで摂った。このとき、初めてレチーナというワインを飲んだ。やたらと臭いがきつくて、美味しいものではない。エロイ氏がチーズとパンを紙に包んでいるので、「3時のオヤツかい？」と聞くと、「あんたの釣りの餌さ」と言ってウィンクしてみせる。

午後、念願かなって、エーゲ海で釣りを楽しむ。ただ、理想の釣り方とはほど遠く、仕掛けは、道端のタバコ屋で120ドラクマ（120円）で売っている代物である。それでも、5メートルくらいの長さの道糸に、おもりと針が3本ついていて、餌さえあれば釣りができるようになっている。フェリーの船着き場の突端に腰をおろして、エロイ氏から貰ったチーズとパンを練って餌を作り、早速投げ込んでみた。待つほどもなく、10センチから15センチくらいの大きさのヒラアジに似た魚が釣れた。釣った魚をまた元の海に投げ帰して釣りを楽しんでいると、後ろに人の気配がした。振り返ってみると、白人の青年が二人立って見ていた。「何をしているのですか？」
「釣りをしているのです」
「何を釣っているのですか？」
「あの魚を釣っているのです」
「釣ってどうするのです？食べるのですか？」
「釣って、また海に返すのです」
「??？」
「あなた方は西ドイツから来たのですか？」
「オーストリアから来たのです。あなたは、ここで働いているのですか？」
「釣りをして楽しんでいるのです」
その二人は暫く釣りを眺めていたが、その内いなくなった。今日の戦果は、ヒラアジ8匹であった。

夕食は、ホテル・メルテミの娘が嫁いでいるレストラン・ミロスに行った。そこの主人が、我々のために朝からロブスターを獲りに行って、是非、御馳走したいというのだ。レストランの調理場に入ってみると、素晴らしいジャンボ・ロブスターが獲られていた。エロイ氏の強い勧めで、丸ごとポイルして貰うことにした。こんなに美味



しいロブスターは、これまでに食べたことがなかった。とにかく、旨い。彼が言うには、

「ロブスターは、丸ごとボイルドに限る。何故なら、焼くとパサパサになるが、ボイルだとジューシーで、しかも、丸ごとなので、中の旨味が逃げてしまわない」のだそうだ。

このときの料理で、もう一つ忘れられない

味がある。それは、チーズの唐揚げである。ギリシャのチーズは塩辛い。この塩辛さと、オリーブ油の香りと、あとから搾ったリモンの香りがミックスして、格好のつまみとなる。このチーズの唐揚げは、帰国後早速試してみたが、オリーブ油の中にチーズを入れたとたん、チーズは溶けて無くなってしまったのである。



翌朝9時、再びフェリー・キモロス号に乗り込み、ビーナスの島ミロスを後にした。出航して暫くすると、強い北風が吹き始め、海は大荒れに荒れだした。ギリシャ人は、この北風を「ロシア風」と呼んでいる。結局ギリシャ本土に着くまで、船酔いに悩まされ続けた船旅となった。



(第四話 おわり)

卒業58周年 京岬会(昭和33年卒)同窓会

平成28年10月17日(月)沼津リバーサイドホテルで同窓会を開催し16名の参加をえた。平成25年から観光は計画せず1泊懇親会の総会としている。

宴会は梅本常任幹事の司会の下、今年3月に鬼籍入りした石原君の冥福を祈り黙祷からスタート。京機会の会長からの祝辞の披露があり感激もひとしお、続いて全員による熱心な近況報告(健康、趣味、意見、お国自慢等)により大いに会は盛り上った。ひき続き、会場を変えて当会の特徴であるショートスピーチと称する軽い勉強会を行う。

1. 日本の詩情 ①初恋(藤村)解説、朗読(倉田君)

②唱歌「夏は来ぬ」考(中村ヤ君)

「夏は来ぬ」と「リンゴの唄」を杉本君のフルートの名伴奏で夫々最終番迄合唱。

2. 完全「自動運転」自動車の時代はやってくるか?講師、野田君曰く「私の感想ではレベル3(*)は目標の2020年より早く実用化しそう。レベル4(**)は世界の夢の挑戦的テーマでこれが実現されれば社会システムの大変革がもたらされると予想される。我国がリーダーシップを発揮して欲しいものである。」

*:安全の最終確認や緊急時対応に運転者が介入

** : 運転者の介入なし

最後に三高寮歌「逍遙の歌」を11番迄同じく杉本君の伴奏で青春時代に蘇っての大合唱でお開きとなった。尚、総会と関連して前日の16日の湯河原での囲碁大会(5名参加)は造田君が昨年に引き続き優勝。又 総会翌日の第67回京岬会ゴルフコンペは11名の参加の下、梅本君が優勝しました。(中村ヤ)

